

[テーマ]

・博士が社会で活躍できる仕組み

## 博士よ白衣を脱ぎ、ラボの外へ出よ～ ノンリサーチ職における博士号の活用法

山本 伸

NPO 法人サイコムジャパン 理事／多摩大学  
医療リスクマネジメントセンター フェロー  
／博士 (工学).

専門: バイオテクノロジー、医療経済、高学  
歴理系人のキャリアパス

【博士号の皆さん、人生は楽しいか？】工学部出身のエンジニアから転身、敏腕経営者となった日本マクドナルド社長の原田泳幸氏は「人生の中の仕事で、仕事の中の人生ではない」と説く。博士号を持つ研究者やエンジニアであっても、仕事は人生の中にあるもの。京都大学の名物教授、地球科学が専門の鎌田浩毅先生は著書<sup>(1)</sup>の中で「自分にピッタリ合った趣味を持ち、楽しく豊かな人生を創造することは、幸福の一つである。感動と安らぎと健康に満ちた生活は、誰もが望む成功人生と言ってよい。」と述べている。彼は人生における3大要素を「仕事、人つきあい、趣味」と定義し、これらをタイムマネジメントすることが成功するために欠かせないともいう。博士も一人の人間。一度しかない人生を楽しむために、3要素それぞれで実現したいことをリスト化し、多く達成していくための時間管理が必須であろう。

【あなたの人生にとって、研究者がベストだろうか？】中長期的な希望、ビジョンを分析するために、イメージマッピングという手法で自身の脳内にある潜在的な欲求を「見える化」してみよう

(<http://www.success4rikei.com>)。研究や仕事からひとまず離れ、人生で実現したいこと、好き、得意、社会に役立ちそうなことを書き出してみよう。共通して浮かび上がる要素はあるだろうか。また、

憧れの人物をリストアップしよう。その人のどこを目標としたいのか、理由も踏み込んで考えてみよう。

この作業を年に一度でも行い脳内を「見える化」してみると、本当に進みたい道や実現したいことに対して博士号取得が必要なのか、いまさら迷いが・・・ならば頭を切り替えてみよう。博士号を持ちながら研究に携わらない“ノンリサーチ職”で人生を楽しむ博士も意外と多いのだ。

【研究者にならない博士は負け組か？】米国企業において研究者・エンジニアになる場合は博士号が必須であり、それ以下の学歴ではステップアップはほぼ不可能である。しかしながら、研究職のまま仕事を続けられるか否か、自身の努力と経験だけで決まるものでもない。プロジェクト失敗、戦略転換による人員整理等で転職かキャリアチェンジを余儀なくされうる。一方、研究業務のマネジメント（管理職）を目指す道もある。組織における研究開発戦略の決定権を持ち全体をリードすることができるのは博士号かつMBAがほぼ必須条件である。管理職になった博士は決して負け組ではない。

米国では博士号取得後ほぼ4人に1人は研究職・エンジニア以外へ転身する<sup>(2)</sup>。営業、マーケティング、経営企画などノンリサーチ職への転身後も、MBA取得の有無によりその後のステップアップに大きな差を生じる。実際、米国企業において、研究職の博士がMBA取得後、ビジネス領域で管理職・経営側となるには、博士+MBAのダブルキャリアが当然である。

日本における研究職は米国と異なり修士卒が中心である（理由はいくつも挙がるが割愛する）。企業姿勢が早急に変わるとは考えにくいから、博士卒が研究職のポジションを得るのは未だ挑戦的である。その一方で近年ノンリサーチ職へ積極的にキャリアチェンジし、博士号を活かして活躍する人材も増加している。特にIT系・医薬バイオ系などの営業やコンサルティング業界、あるいは会

社に入らず起業を選択する博士も出現している。今後期待されるのは、技術の目利きとして市場調査・分析を行い新たな市場を創造できるテクニカル・マーケッターであろう。ノンリサーチ職にキャリアチェンジする博士は時代の追い風に乗っているのかもしれない。

科学教育・啓蒙活動も博士号取得者が適ししやすい分野である。理科教育は科学技術立国の基盤作りに欠かせない。加えて、後を絶たない健康食品詐欺やエセ科学の氾濫、不十分な医療情報が社会に与える不安を取り除くため、科学ジャーナリズムこそ博士＝専門家の立場からの情報発信が強く望まれる。

【脱学閥→学歴社会への変革】米国では博士号など学歴がその後のキャリアパスを決定付ける“免許”であり、学位取得はキャリアアップと高収入を意味する。一方、日本における博士号は次のような点からメリットと言いがたい：(1) 学歴よりもどの大学を出たかという学閥社会 (2) 専門性を汎用化する教育がなされていない (3) 博士課程修了と論文博士というスタンダードの異なる博士号が混在する (4) そのスタンダードが大学間および学部間で異なり博士の「質」の均一性がない。このような現実では、企業側でも博士卒を積極的に採用するリスクより、ある程度均一な修士卒を自社教育する方が合理的であろう。一方、欧米の大学や企業との付き合いで、博士号のない日本の研究者は「研究者」として認められない為、企業側としては博士を雇用したいのも本音である。

【ノンリサーチ職のためのプラットフォーム】博士の「質」担保には、スタンダードを共通化することが避けて通れない。それはインパクトファクターなど客観的かつグローバルな評価指標が候補の一つであろう。

加えて、現在の大学院教育では埋められない業務経験や知識を補完するプラットフォームの構築が望まれる。つまり、博士号を活かせるノンリサーチ職を資格・制度化し在学者またはポスドクが

教育研修やOJTの機会を得てキャリアチェンジに繋げる「ノンリサーチ職への教育研修プラットフォーム」を産官学共同プロジェクトで提案したい。

以下の3つの仕事は博士号の高い専門性を活かせる可能性が高く、教育研修制度による資格化を試みる価値があると考えられる。(1) マスメディアの医学関連記事を専門家の目で診断する「メディアドクター」。特に豪州での取り組みが先進的だが国内でも東大等で実験的取り組みが始まった<sup>(3)</sup>。(2) 食の安全を維持するため、消費者に本音を伝える真の独立系専門家集団による食品評価。米国では複数の民間サブリ評価機関が製造元、販売元と利害関係なく結果公表し有料ウェブサイトとして事業化されている<sup>(4)</sup>。(3) 市民を巻き込んだ科学コミュニケーションのイベントを設定、運営する専門家。ワークショップ・デザイナー育成プログラム<sup>(5)</sup>が参考になる。

同時に、先駆者による生の情報を共有する仕組みも望まれる。キャリアチェンジのノウハウ、仕事の魅力や博士号の活かし方について、成功・失敗体験を共有しベストプラクティスを探ることは、博士が研究以外の社会へ広く進出する大きな手助けとなる。

忘れてはならないことは、博士は研究職に固執せず、コミュニケーション力、マネジメント力やリーダーシップを身につけ社会適応力を身につけることである。

#### 【参考文献】

1. 鎌田浩毅著：成功術～時間の法則（文春新書）
2. <http://www.nistep.go.jp/achiev/abs/jpn/mat103j/pdf/mat103aj.pdf>
3. 宮田裕章．メディアドクタープロジェクトの方法と課題．医学のあゆみ 2007．222；12：907-10
4. <http://www.consumerlab.com/>など
5. <http://www.hirc.aoyama.ac.jp/wsd/index.html>